落とし穴

二月　一

穴を見つけた。

……別にそんなことで日常生活は変わらないが、どこか、気になった。

家に帰ったら、玄関が水浸しになっていた。どうせ妹のせいだろう。暇な奴だ。靴を下駄箱に避難させる。濡れたままでいいのか？　とも、思ったが、気にしない。飯食って風呂入って、早く寝よう。

案の定、寝ようとした時に妨害を受ける。わかったよ。わかった、わかった。妹よ、頼むからトランプのケースの角で足を叩かないでくれ。皮剥けるだろ。

おはよう。今日は何日だ？　寝不足で日時の感覚がわからん。十二日？　月日が経つのは早いな。ついて行けないぜ。

はあ、なんであの年で夜泣きが止まらないんだ？　おかげで夜はぐっすり眠れず、そのぶん学校で寝て、成績は常に勉強難民レベルだ。そういえば、あの年で夜泣きなんて普通おかしいだろ。愛か？　愛が足りないのか？

おっと、そういえば昨日、穴を見つけたんだっけな。まあ、放課後にでも寄ってみよう。もうすぐ予鈴がなる時間だし。走らなきゃ間に合わないな。

くそ、なんであそこに学年主任が立っているんだ？おかげで遅刻じゃねえか。いつもは特に生徒に関わってこないくせに、朝っぱらから身だしなみの検査なんかするんじゃねえよ。これはな、地毛！　地毛なんだ！　よく言われるが、これは遺伝の産物だ。断じて作られた色ではない。違いがわからないなら、髪を染めてる奴を探すのなんてやめろ。

はあ、今日も散々だ。暇な奴みんなで、カラオケ行くなんて、あいつらは元気あるな。少し分けて欲しいぜ。

そうだ、穴だ。昨日ガキどもが戯れている空き地の一角に見えたんだった。よし、近づいて、よく見てみよう。

……って、深！　誰が掘ったんだ、こんな穴。子供の悪戯ってレベルじゃねーぞ！　落ちたら、足を骨折してもおかしくないだろ。

折角だから、石でも落とそう。まあ、この消しゴムくらいの大きさのやつでいいな。

ヒュー……　コッ。

思ったよりは深くないな。今日の天気が曇りで、あまり光が入らないから、底が見えないほどに深く見えるのかもな。
うん、見れば見るほど不思議だ。側面を触ってみると、人の手で削られているとは思えないほどすべすべしている。何で掘ったのだろうか……

……ドン！
「うお！」

気がついたら、そこは血の海だった……
「…んな訳ねーだろ！」
「む？　そこのお主、起きたのか？」
ほとんど周りは暗闇だ。上から、幽かに赤い光が差し込んでいる。今いるここは案外広い。穴に落ちたのか？
「話かけても全く返事がなかったから、心配じゃったんじゃぞ」
「く、一体どこだ？　ここは！」
「お主も好奇心で空き地の穴に近づいたんじゃろ？　ここはその中じゃ」
じじいは嘘を言ってない。周囲の薄暗さが、それを証明している。
「なんてこった！　落ちちまったのか…　そういえば、誰かに押されたのかもしれねえ」
不意に、頭を掻こうとする手に力が入らないことに気づく。
「それはそれは、気の毒じゃのう。わしは自分から入ったんじゃ」
「は？　なんで？」
「わしはもう後先短い。そんな中、この穴に出会ったんじゃ。わしは憧れておったのじゃよ。冒険に、非現実に！」
は？　なんだこの電波じじいは。危ないんじゃねえか？
「気がついたら、着の身着のままで穴の中へ入っておった。じゃが、落ちたときのショックで、足をしこたま挫いてもうた。もう、助けを呼ぶこともできん。わしはもうこの穴の中で朽ちるのじゃろう。そう考えていたとき、お主が落ちてきたんじゃ。お主、体は大丈夫か？」
俺は自分の体より、あんたの頭の方が心配だ。だが、言われてみると、体の感覚がおかしい。まるで体が麻痺しているような、動けないような……
「うまく、動かない」
「どこがじゃ？」
……おかしい。体が全く言う事を聞かない。かろうじて動かせるのは、口、目、顎くらいだ。
「全身だ」
「まさか、落ちたときに首をやってしもうたのか？」

「おそらく……　そういえば、後ろから押されて、頭から落ちちまったんだ」
　そうか、それで脊髄を……
「頭を庇って首から落ち、それで意識を失っておったのか。そうとう酷いのじゃな」
「ああ…　終わったな。俺の人生」
　生きているうちにやりたいことが一杯あったな、もうだめなのか……　悲しすぎるぜ。
「残念じゃが、怪我なんぞなくて……！」
「ん、なんだ？」
　何か、体とは別の違和感を感じる。
「……」
「なんだよ！　気になるじゃねえか！」
「……夜じゃ…」
　そういえば、先ほどより、闇が濃くなったな。
それに、周囲の空気が変わった。
「は？」
「夜じゃ！　奴じゃ！　奴が来るぅぅぅぅ！！」
「なんだ！？　何を言ってやがる？」
　夜なんて普通だろ？
「ひゃ、あひゃひゃ、ひゃっはっははははあぁぁ！　うひ、ひゃ、ひゃぶひふらっしゅうぅ！」
「……」
　どうやら、こいつ頭が狂っちまったらしいな。まあいいか。どちらにしろ、俺の死が確定事項であることは変わりない。
「肉……」
　何か、気配が近づいて来る。ずるっずるっ、という恐ろしい擬音と共に。
「は？　ん、な…！」
　どういうことだ！？　意識が、遠くな……

　ん？　ここは、見知らぬ天井？　いや、自分の部屋の天井だ。
　何だ！？　夢だっていうのか？　あの鮮明な映像が……　おかしいだろ。
　体は、動く、動く！　怪我一つ無いみたいだぜ。ひゃっほう！　草原を縦横無尽に走り回りたい気分だぜ！
「お兄ちゃん！　朝だよ！　って、何ベッドの上で飛び跳ねてるの？　気持ち悪いなあ」
　何！？　朝！　あさ、朝？　そうか、今は朝なのか、いつのだ？
「今日は何日だ？」
「十二、だよ？　寝ぼけてないで、早くご飯！」
　……まじで、夢だったみたいだな……
「そ、そうかわかった。着替えてすぐ行く」
　何がなんだかよくわからんが、早く行かないと遅刻す

るようだな。

早歩きで学校に着くと、やはり、主任が検査してやがった。早歩きで行って良かったぜ。でも、なんで夢どおりにいくんだ？　まさか正夢、なんて言わないだろうな。

同じような授業、同じ台詞を誰しもが喋ってやがった。二回目ともなると、つまらんな。さて、穴に行くか行くまいか、結局結論が決まらなかったな。そう考えながらも、空き地に足が向かってしまうというのが、人間の本能というものだな。

ああ、やっぱり穴はある。今度は覗かないようにしないとな。……は？

ごぽっ、ごぽぽぽ……

み、水！？

…シュン。

い、色が変わったぁぁ！　その姿、まさに地面！　何だ、何が起きたんだ？

「見たね」

「へっ？」

振り向くと、そこには、白いコートに身を包んだ、とても不思議な感じのする女が立っていた。若いな、年は俺とそれほどかわらないだろう。だが、なんだこの景色に合わないような違和感は……

「まさか、見ている人がいるとはね。君は、不運だね」

近づいて、そして、抱きついてきた。

ふわっと、独特の甘い臭いが広がる。柔らけえな、おい。

「い、いきなりな、なんすか！？　…っ！」

ふと、目眩がして、世界が回る感覚がする。

「好奇心で見ちゃダメだよ」

さっきまでとはまるっきり違う。泥臭さと、引っ張られる強い力を感じる。触れる感触から、取り込まれる感触に変わる。

「く」

自分が崩れるのを感じる。痛みは無い。まるで、身体の自由が奪われていく感じだ……

「惜しいね。あと少し来るのが遅かったら、何もなかったのに」

「いいっ！　俺は何を見たんだ？」

まだ、きついが喋れる。

「私の、消失。見られたら、お終いなの」
「な、なにもんだ……」
「私？　穴だよ。人が落ちる為の。さっきあなたが見ていた存在そのもの。今から、あなたは墜ちていくの。さようなら」
　ああ、これが、俺の人生の終着点か、一人で死ぬよりはましか。

「ウィー　キャン　フライ！　どこまでも～！」
　落ち～る～、落ち～る～、地獄の底まで～。
　ありゃあなんだったんだ？　自分が何処かへ向かって落ちているのはわかるけど。見当もつかないね。俺馬鹿だから。
　落ちながら、目を瞑って、足を伸ばしながら回転してみる。一度はやってみたかった。
「伸身の新月面が描く放物線は～、栄光へのか……　げふぅ！」
　そして、不意に地面は現れた。
　ばきゃっと、とても良い音を出しながらの着地。痛みは感じない。たぶん、生きてないからかな。
「地面が近づいていたのか……　我ながら惨めだ」
　今の自分は、存在だけしているようなものか？　出血した足も立てるし。動ける。耳も聞こえるし、眼も見えている。
　今いる所の足元は土で、周囲は開けている。
「さて、やることもわからないし、寝るか」
　やることに困ったとき、寝ることが一番だ。寝不足だったし、起きてからやることは考えればいいや。さあ、睡魔よ、カモン！

　……とまあ、寝る！　って考えている時って、眠れないものだよな。どうしてだかよくわからんが。

「お兄ちゃん、ここで何寝てるの？　風邪ひいちゃうよ？」
　目を開けると、そこには。薄いピンク色のワンピースを着て、麦わら帽子を被った少女がいた。
「うおおおぉぉぉ？！　妹か？」
　……いや、違う。髪は長く、家の妹と年齢も近そうだ。似ているが、雰囲気は全く違う。
「はい？　違うよ。私は」
「そうか。じゃあ俺をお兄ちゃんと呼ぶな。紛らわしい」
　おじちゃん、と呼ばれるよりはましだが、その呼び方のには語弊が生じる。

「そう。それは別に良いけど、お兄ちゃん上から来たんだよね？」
……良くない。話を聞け。
「だから、やめなさい。で、上から来たのがなんだって言うんだ？
「じゃあ、一言伝えないといけなくて」
嫌な気配がして振り返るが、別に何もいない。
「なんて？」
その子は、にぱっと天使のような、太陽のような微笑みを見せながら、こう言いやがった。
「ゲームオーバー。お疲れ様！」